

平成 29 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06114

研究課題名（和文）フランソワ・ラブレールにおける魔術の諸相と、その文学的想像力への活用についての研究

研究課題名（英文）Rabelais, magic and literary imagination

研究代表者

関俣 賢一（SEKIMATA, Kenichi）

東京大学・大学院総合文化研究科・助教

研究者番号：80759283

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：フランス・ルネサンスの著述家フランソワ・ラブレールの作品に現れる魔術の様々な在り方を同時代の理論家であるアグリッパ・フォン・ネットスハイム、カルカニーニ、ロディギヌスなどと比較することによって検討し、それがどのようにして文学作品中で文学的想像力として昇華されているかを明らかにした。当該主題に関して幾つかの典拠を明らかにし、魔術の脱神秘化と神秘的魔術の寓意性という二重性から分析した。

研究成果の概要（英文）：Our research reveals that Rabelais' work, which is inspired by humanists such as Heinrich Cornelius Agrippa von Nettesheim, Celio Calcagnini and Rhodiginus, abounds in allusions to Renaissance magic. We explain how these images of magic stimulate the reader's imagination and encourage the reader's intellectual exploration. We also discovered several specific passages which influenced Rabelais' work, and analyzed his works focusing on the dual structure of debunking magic while at the same time using its workings to stimulate the reader.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス・ルネサンス ラブレール 魔術と文学

### 1. 研究開始当初の背景

フランス・ルネサンス文学の巨匠フランソワ・ラブレーにおける魔術の重要性は、ラブレーの死後、十六世紀後半から常に示唆され続け、近代ラブレー研究が誕生したここおよそ百年間も指摘されて来たが、国内・国外を問わず、今まで真摯な研究の俎上に乗せられることは殆ど無かった。その理由は、おそらく論題のいかがわしさもさることながら、ルネサンス魔術が哲学・宗教・科学の様々な側面を総合した、複雑かつ難解な思想だからであると考えられる。フランスにおいてすら、この主題は例えばエリファス・レヴィやフルカネリといった文学者による好事家的好奇の枠を出ない場合が殆どであった。他方で、ラブレーの魔術に着目した学術的研究者は、欧米に数少ないながらも存在する。だが彼らも、(一見するとこの論題に適していると思われるが、実際は捏造された偽作の疑いが強い)『第五の書』を中心に論じることが多く、着実な研究手法を適用してはいない。そのような中、ミレイユ・ユションによる批評校訂版『ラブレー全集』(coll. « Pléiade », Gallimard, 1994) は例外的に、魔術の諸問題を豊富に盛り込んだ序文・注釈が付与されており、摯実な研究へ新たな道を切り開いたと評されている。例えばギイ・ドゥメルソンらによる評 (Guy Demerson et Myriam Marrache-Gouraud, *François Rabelais*, coll. « Bibliographie des écrivains français », vol. 32, Memini, 2010) は典型的である。だが、ユション版全集の主な力点は、むしろ文献学的な貢献にあるため、より本格的な魔術研究が俟たれていた。報告者はユション教授の指導の元パリ第四大学(ソルボンヌ)に提出した博士論文において主として魔術実践の具体例とラブレー作品のテクスト分析を行ったが、理論的な視点からの分析を深化させる必要があった。

### 2. 研究の目的

本研究は、フランソワ・ラブレーの作品に表れる魔術の諸相を明らかにし、彼がいかにして魔術を文学的想像力へと奉仕させ、創作の糧としたかを考察するものである。具体的には、ラブレーへの影響が確かな人文主義者達の魔術理論を選別し、そこからラブレー作品を照射する。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究の方法は、ラブレーへの影響が確かな人文主義者達の魔術理論を選別し、そこからラブレー作品を照射することである。主な比較対象となる人文主義者はコルネリウス・アグリッパ・フォン・ネットスハイムやロディギヌス、カルカニーニなどである。

ルネサンス魔術のマニュアルとも呼ぶべきアグリッパ・フォン・ネットスハイムの『隠秘哲学』は第一級の資料であり、本研究の主要な比較対象となる。

カルカニーニの『リネラエオン』と『愛

の魔術要諦』の読解・翻訳・註解作業を適宜行いながら、ラブレー作品分析に活用する。

また、上記作業を行いながら、一次・二次資料を整理し如何にして魔術の理論と定義がラブレー作品に反映されているかを分析する。

### 4. 研究成果

(1) 上述の方法により本研究課題を大きく進展させることが出来た。特に平成 27 年度にイタリアのフェッラーラ、平成 28 年度にパリのフランス国立図書館へ資料の調査・収集のため出張できたことは有益であった。研究成果を以下に記すが、それぞれ上述のように先行研究では等閑視されてきた嫌いがあり、本研究の独自性は高く、またその他の研究主題との関連も多く発展性は高い。研究期間中は作品分析に重きを置いたが次年度以降も成果を論文などの形で発表して行きたい。

(2) アグリッパ・フォン・ネットスハイムの『隠秘哲学』との比較考察から出発して、ラブレーにおける魔術の考察に大きな成果が得られた。

ラブレーはアグリッパ・フォン・ネットスハイムに代表される魔術書から得た知識を、単なる脱線的な蘊蓄としてではなく、文学的機能の担わされた技法へと昇華し、創作の糧としたことが確認された。ラブレーは魔術を善悪に区別する基準を独自に立て、文学的創造性に奉仕させた。即ち、虚栄的・虚飾的好奇心に衝き動かされた悪しき魔術を最下層に置き、種々の発明により文明の発達を促し社会的に有益な「数学魔術」と、実験精神を推進し科学性を促す「自然魔術」の、二種の善き魔術を経て、幻惑的な驚異の描写により読者を探求へと誘う「寓意的魔術」という至高の段階へと至る階層性が、寓意的に描かれている。ラブレーにとって至高の魔術とは、文学的想像力を誘発する「寓意的魔術」である。この過程はラブレー『第四の書』における「ガステルの挿話」に象徴的に描かれており、至高段階に至るまでの前三段階がアグリッパ・フォン・ネットスハイムの『隠秘哲学』全三巻の各巻に対応している。

ラブレーはこの弁別基準を打ち立てる際にアグリッパ・フォン・ネットスハイムから大きな影響を受けているが、そこに至る理論的な考察を進展させるにあたって着想を得たのはまずマリシリオ・フィチーノといったルネサンスの哲学者であり、そこからアウグスティヌスやトマス・アクィナスといった神学者の著作により親しみ思索を深化させていったと考えられる。上述の弁別基準に現れる鍵概念はこうした正統教義に馴致し物語内部において独自の構造化が為されている。

(3) カルカニーニとの比較研究も大きく進展し、以下の成果の一部は日本フランス語フランス文学会において口頭発表することがで

きた。

まず『リネラエオン』の作品構造がラブレール『第三の書』全体のそれと一致することを確認した。「リネラエオン」は以下のような筋の「寓話 (Apologus)」である。人類に益せんとする自然の女神がヘラクレスに待ち受ける苦難を知り、彼を救わんと幾つもの神託を伺うものの、その曖昧な言葉に失望し、大地の女神と共に霊草を創り出す。この植物は作中ではっきりと名指されてはいないが亜麻である。霊草はその秘められた特性によって諸々の発明品を可能にし、さらに霊薬となってヘラクレスは救済され神の座を得る。すなわち、(A) 難題の提示、(B) 一連の神託への行脚、(C) 霊草・亜麻の賛美と霊草による問題の解決、という三部構成になっており、これはパニユルジュの結婚問題を巡る『第三の書』の構成に対応している。

そして共通する末尾部分の霊草賛美を詳細に分析し、カルカニーニの魔術的科学技术論の思想背景として特に「ヘルメス文書」の『アスクレピオス』が存在し、カルカニーニを経由してラブレール作品に通底するものであることを明らかにした。すなわち『アスクレピオス』には人間の身体性による自然の操作可能性と共に、それにより可能になる科学技术の発展が肯定的に表明され、世界各地と人間の繋合という神の意志を完遂する科学技术発展の象徴的代表例としての帆・航海術とが挙げられている。これはカルカニーニとラブレールに共通するものと言える。

また、『アスクレピオス』の影響はフィチーノ『プラトン神学』(第13巻、第三章)を媒介としたものであると考えられる。ここでは肯定的な身体観と自然支配という自然魔術の基礎となる思想が述べられているが、それによる人間の神格化にまで直截的に踏み込まれており、カルカニーニとラブレールの賛美により近いものとなっている。

(4) また、その過程で議論の分かれていたパンタグリユエリオンの産地の一つを特定した。研究開始当初には予期していないことであり、付随的な副産物としての小発見ではあるが、ラブレール註釈に小さな貢献をすることが出来た。

霊草パンタグリユエリオンはラブレールの主たる典拠となっているプリニウスにおいてインドにある灼熱の砂漠であるとのみ書かれているが、ラブレールにおいてはカルパシアという地名が付加されている。プリニウスには存在しないこのカルパシア産出という情報をラブレールがどこから得たのかは不明とされていたが、実際にはロディギヌス経由でパウサニアスを直接読んだのだと考えられる。

また、ラブレールの言うカルパシアがどこかについても、クレタ島とロードス島間のカルパトス島であるとする説と、キプロス島の町であるとする説に分かれ不明とされて

いた。ここでの詳述は避けるが、ラブレールは後者を指しており、フレイザーがパウサニアス註解において不燃性の鉱物はキプロス島で豊富に産出されたと論じていることはその典型的な証左となる。

(5) 『愛の魔術要諦』に関しては、この作品をラブレールが読みその一節を自作に取り入れたことが知られていたが、より詳細に魔術の脱神秘化という点でラブレールに影響を与えた可能性の高いことが判明した。すなわちカルカニーニは魔術に科学的解釈を施すことによってその詐術性を暴露しているが、これはラブレール作品において魔術と科学の境界線上で開放される文学的想像力の靈感源の一つとなっていると推定できる。近代的科学の黎明期であるルネサンス時代にあって啓蒙的傾向は人文主義者に共有されたものではあるが、この点においてアグリッパ・フォン・ネットスハイムやロディギヌスとも軌を一にしていることは着目に値する。

(6) ラブレールにおける魔術理論とその文学的想像力への活用との関係については興味深いことが判明した。パンタグリユエリスムという謎めいた思想はラブレール作品における鍵概念と言えるが、『第三の書』の定義でこれは «une forme spécifique, et propriété individuelle» であるとされている。この箇所は「或る類型的な一形相、個別的な一特性」(渡辺一夫訳)などと訳され、エティエンヌ・ジルソン以降トマス主義に対してラブレールがフランシスコ会士としてスコトゥス派の個体化理論に従ったものであるとのみ指摘されてきた。だがここでトマス主義への対抗軸はむしろ個別性と星辰の影響力を認め自然魔術に連なる理論を展開してきたアルベルトゥス・マグヌス、アルナルドゥス・デ・ウィラノウア、ピエトロ・ダバーノといった思想家たちであると考えられる。リヨンにおけるラブレールの先達医師であるサンフォリアン・シャンピエはピエトロ・ダバーノの註解を出版しており、シャンピエからの経路を踏まえるとラブレールにおけるピエトロ・ダバーノの重要性は高い。パンタグリユエリスムの定義はこうした隠秘的特質との関連文脈で考察されるべきであり、これら概念の科学的脱神秘性と隠秘的神秘性の両義性がラブレール作品の文学的な二重性と並行していると言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

関俣賢二、「霊草パンタグリユエリオンの自然魔術と科学技術的創感性」、日本フラ

ンス語フランス文学会、2016年5月28日、学習院大学・目白キャンパス（東京都・豊島区）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

関俣 賢一 (SEKIMATA, Kenichi)  
東京大学・総合文化研究科・助教  
研究者番号：80759283

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )